



株式会社 北園工業
代表取締役社長

北 園 一 文

解体業で腕を磨き、独立を果たした後、父親が手掛ける造船・配管工事の会社に入社した北園社長。

ゼロから知識と技術を蓄積し、先代から代表職のバトンを引き継ぐことになった。

「共に頑張ってくれる従業員や仲間、支えてくれる妻のお陰で今がある。

今後は事業規模をさらに拡大し、利益が出たら皆に還元していきたい」。

常に自分よりも周りの人を優先する姿勢。それは、父親から教わったことでもある。

何より「人」を大切に、「人」と共に歩む——そうして確かな未来を切り拓いていく。

「今があるのは、周りの人たちのお陰。
『人』を大切に、これからも歩みを進めていきたい」



北園みゆきさん、岡部直樹氏を交えて

Special Interview

株式会社 北園工業

三重県津市大門 6-5 プライム津大門 305
URL : <https://kitazonokogyo.com>

高品質な仕事で信頼に応え 紡がれてきた伝統を守り続けていく

造船や配管工事、発電所やプラントの工事、震災復興業務などを手掛ける『北園工業』。1987年に福岡県で有限会社として誕生し、三重県への移転を経て2006年に株式会社に組織変更し、現在に至っている。北園社長は父親である先代から事業を引き継いだ二代目。タレントの野村将希氏がインタビューを行い、個人事業主として解体業を営んでいたという社長の歩みを紐解き、事業にかける想いに迫った。

——早速ですが、北園社長のこれまでのご経歴からお聞かせください。

学業修了後は友達で紹介で解体業界でキャリアをスタートしました。当時はいわゆる「3K」の時代で、賃金は安かったですしブラックな環境でしたね。18歳でそちらに入って、20代後半まで勤めました。その後、横浜で個人事業を立ち上げたんです。

——独立にあたっては、何かきっかけがあったのでしょうか。

以前から独立したいとは思っていたのですが、勤務先の経営状況が芳しくなく、やがて給料も支払ってもらえなくなってしまったんです。それで、一緒に仕事をしていた仲間数人でスタートしました。

——いざスタートされて、順調に進みましたが。

最初は仕事もありませんし厳しい状態でしたね。それでもついてきてくれた仲間に給料を払わなくてはいけないので、毎日営業活動に奔走しました。その後も同じように給料をもらえなかったという人や解雇されたという人が仲間に加わり、8～10人ぐらいまで増えたんです。独立してから結婚もしたので、妻にも随分と苦労をかけました。妻も仕事を持っていたので、一時期は妻に食べさせてもらっていたような状態で。情けないことですが、本当に妻の支えがなければここまでこれませんでした。

——奥様の献身的な支えを受けて事業を推進してこれたと。こちら、三重県に來られたのはいつごろですか。

5～6年ほど前のことですね。実はこの会社は父が35年ほど前に立ち上げた



代表取締役社長

北園 一文

もので、造船や配管、発電所、プラントの工事などを手掛けてきました。父が高齢になってきたということで、後を引き継ぐことになったんです。

——解体とはまた違う業種ですが、思い切ってご決断されたのですね。

ええ。ゼロから詰め込むように勉強をして、周りの先輩方にも教えていただきました。父は「死ぬまで現役で代表職を務める」と言っていたので、私もそのつもりだったのですが、年を重ねて限界を感じたのか、急に「代表職を交代する」と言い出したんです。

——それらしい前触れもなく？

そうなんです。ある日突然、「もう俺の時代じゃない」と。結局、父と一緒に

仕事をしたのは1～2年で、まだまだ業界経験が浅い私が代表を務めることになりました。

——そのわずかな期間でも、頑張っておられる姿をご覧になって、任せても安心だと思われたのですね。今はどんなお仕事を主軸に手掛けられていますか？

発電所の新設工事や配管工事、溶接工事が多いですね。全国各地の原子力発電所や火力発電所に入り、半年ほどの長期出張になることも珍しくありません。

——お仕事をされる中で大切にされているものは何でしょう。

「人」ですね。何をやるにしても、1人ではできませんから。皆が安心して生活できるようにすることが経営者の役割ですが、そのために時として多少の無理を言うこともあるんです。長期出張に出てもらったり、青森の雪の中の現場をお願いしたり。皆、そういう仕事でも文句を言わずしっかりこなしてくれて、ありがたく思っています。

——それは頼もしいですね。人望があるからこそ、従業員さんは皆「社長についていこう」と頑張っておられるのだと思いますよ。いつも従業員さんや職人さんにおっしゃっていることはありますか。

まず、理由もなく休まないこと。そして、品質を落とさないこと。社会人として当たり前のルールではありますが、実は父の時代は守られていないこともあったんです。例えば他県の工事に行くのに職人を手配していても、当日に来ていなかったといったトラブルがありました。

——そんな時はどうされるのですか。

父はもう慣れていて「仕方ない」って笑っていましたね。昔はそれで済むとこ

ろがあったのかもしれませんが、今はそれで許される時代ではありません。会社としての信用に関わる問題ですし、次から依頼してもらえなくなることもありますから。今はコロナの影響もあって発注が減っているという状況もありますので、一つひとつの現場をこれまで以上に大切にしなければならない。その中で質の高い仕事を納め、次へとつなげていけるような体制を整えていきたいですね。——ところで業界としては、職人さんの数は減っているのでしょうか。

そうですね。高齢化が進んでいる中で、当社では50～60代の職人がたくさん活躍してくれています。私のほうが年下ですし、業界経験もないので最初は相手にもされませんでした（苦笑）、色々と話をする中で徐々に認めていただけるようになりました。この仕事は資格と技量さえあればどこに行っても食べていける。けれども現場に入るには年齢制限もあるので、腕があっても仕事ができないという人も増えているんです。今は若い人材の確保と、ベテランの技術を若い世代に伝えていくこと。その両立が大きな課題ですね。

——お話も尽きませんが、最後にこれからの展望をお聞かせいただけますか。

これまでを振り返ると苦労もありましたが、その分返ってくるものも段々と大きくなってきました。今後はさらに事業規模を拡大して、得た利益は皆に還元していきたいですね。また、仕事を依頼する側にとっても、勤めている人にしても、『北園工業』なら大丈夫と言われる会社になりたいと考えています。

(2022年9月取材)

「人を大切に」すること

▼何より働く「人」を大切に、事業の舵取りを進めている北園社長。「人を大切にすることは、父から教わったことの一つでもあるんです。父は私以上に人を大切にする人なんですよ」と語る。それを物語るエピソードも伺うことができた。「大手企業の役員が並ぶような打ち合わせの場で、父は従業員からの電話にも平気で出るんです。電話は給料を前借りしたいという内容で、重要な打ち合わせ中にも関わらず、『いいよ』と話していました。私としてはさすがに、そういう場では電話に出ないようにと意見しましたが、ずっと従業員を第一に考えてきた父にとっては、それが普通のことだったんですね。休日でも何でも、従業員からの電話には対応しますし、親方としては最高ですが、経営者としてはいただけません」と笑う。先代と二代目、各々異なる時代背景もあり、考え方ややり方が異なるのは当然のこと。けれどもその中で「人を大切にすること」は共通しており、それは今後も『北園工業』の伝統として脈々と紡いでいかれるに違いない。

「結婚以来、北園社長を公私共に支えてこられた奥様のみゆきさんが、『主人は若いころから苦労してきたので、これから幸せになってもらいたい』とおっしゃっていたのが印象的でした。社長は奥様に苦労をかけたとおっしゃり、奥様は社長の幸せを願う。とても素敵なご夫婦の絆を感じました。これからも従業員の皆様と共に頑張っていたきたいです」

野村将希・談



タレント
野村 将希